HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	次世代型のキャンパス計画　文化創出時代の大学像をめざして
Author(s)	小林, 英嗣
Citation	高等教育ジャーナル, 3, 182-188
Issue Date	1998
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.3.182
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29833
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P182-188.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

次世代型のキャンパス計画
文化創出時代の大学像をめざして

小林英嗣*
北海道大学大学院工学研究科

Campus Planning for the Next Generation

Hidetsugu Kobayashi**
Graduate School of Engineering, Hokkaido University

Abstract —

1. Problem of University

At the beginning of the coming next century, we have a great hope that university should become as a center of intellectual creation, so the university's own responsibility becomes important. To correspond to a remarkable change of university surroundings, and to reconstruct the Japanese educational philosophy and system through out 50 years after World War Ⅱ, it is an important theme to create a new vision for university's perspective, and the environment to support the university vision based on the educational programs and organization.

2. Philosophies of the "campus master plan"

(1) Succession and preservation of native landscape.
(2) Succession and development of campus's history.
(3) The campus as "a place for human life" is a proper idea for research and education.
(4) The campus as "a social device" reflects regional character.
(5) The campus as "a city integrated in the main one"
(6) From "a researching and educational place" to an environment for community and citizens

3. Basic concepts of environmental forms.

(1) To form "Ecological-campus", coexistence between natural ecological-system and educational research activity.
(2) To form the university 's center as communication place with citizens.
(3) To reconstruct the educational researches zone expending and improving the education and researches site.
(4) To plan and design for research-village zone, creating the next vision for the university which cooperates with the society.

1. 大学の発生と近代社会での展開

近代合理主義の精神にもとづいた近代的な社会形成への試みは、その本来の素形においては、病苦や貧困などから人びとの生活を守り、社会からの疎外や非人間的な生活環境や社会の生産性を改善し向上するという極めて素朴なヒューマニズムをもった主張であり、人間性の回復を主題とした多くの試みが20世紀の初頭から世界的な規模で展開されてきました。

しかし、新しい近代的な社会を創りだそうとした過程で、経済至上主義的な方向性のみが強調され、都市社会に大きな歪みが生じ、思わぬことも起きてきました。それまでに日本ばかりでなく世界の各地域に存在していた伝統や歴史性や地域性に根ざした生

*）連絡先：060-8628 札幌市北区北13条西8丁目　北海道大学大学院工学研究科
**）Correspondence: Graduate School of Engeering, Hokkaido University, Sapporo 060-8628, JAPAN

活環境や都市環境との間に大きな乖離をつくりだしたり、あるいは破壊的と見なされる開発行為や建築的な行為も行なわれてきました。豊かで大きな近代社会や環境を描きだすことに主眼がおかれた近代的な文明の開発行為やその普遍化の行為において‘人間的な生活や生存〞歴史的な環境観や自然〞地域的な風土や価値’が忘れられてきたことも多くありました。近代的な社会の計画と形成においては、多くは「公共」と「私」あるいは「公共」と「個人」という対立の構図にもとづいて、その姿が描かれることが多かったからだと考えられます。

そして、社会の近代化とその展開を支えてきた一つに、大学があり、人材を育んできたキャンパスがあるわけです。中世ヨーロッパに生まれた大学は、その創世記には固有の空間や特定の場を持たず、教師と学生（＝市民）が知的時間を共有する間だけそこにあらわれました。まちかど、教会、牧師の住居、街中の貸し部屋、多くの人の往来のある場、橋のたもと、広場などが大学の出発の原点でした。やがて街路の両側に大学の施設や、教師、学生の住居などが街と渾然一体となって存在するようになり、自律的な部分がやがて大学として組織化され発展していったのです。

つまり大学の創設期には閉じた輪郭を持たず、緩やかなまとまりを保って市街地のなかに展開していたのが大学です。やがて一つの中庭を囲むように大学を構成する建物が集積し、共同生活の小さなまとまりが創りだされ、それを単位として成長してゆきました。さらに大学が国家や社会が要請する機能や役割を大きくし、宮殿形式に似た形を取りながら都市と共に成長してゆきました。

巨大なオープンスペースのなかに独立して教育研究の建物が配置され、オープンスペースのなかにホールを中心とした強い左右対称の軸を持ちながら、いわゆる大学キャンパスが計画的に形成されたいったのはアメリカにおいてです。大学は市街地から離れたところに自立して創られはじめました。タウンとガウンの分離です。アメリカ型の大学は、３方を建物で囲まれた広場（オープンクワッド）を基本の単位として次々に連続され成長を遂げて近代の大学キャンパスへと発展してきたわけです。

中世から近世、そして近代へと社会が変化してゆくなかで、大学の目標と有り様とそしてそれを表出するキャンパス自体も大きく変容を遂げてきています。その変容（＝大学の変容）を透視すると、いま、次世代を目指した大学像を創出し、それをシンボライズし、実現するあらたな大学キャンパス像を描きだす時期に来ていることがわかります。

2. 文明形成時代のキャンパスと文化創出時代のキャンパス

では21世紀に向けて社会や都市はどのような生活や価値観にもとづいて創られてゆくべきなのでしょうか。そして大学像は？　大学という環境（＝キャンパス）の在り方は？　社会との関係は？　21世紀の入口にある今、‘文明’と‘文化’を区別しながら、この問題を考えてみることにしましょう。

均質化、近代技術、分析、装置、組織、市場経済、国家、合理などは‘文明’の典型だと言えます。一方、個性、風土観、環境観、道具、集団、生活習慣、ライフスタイル、芸術表現、地域社会などは‘文化’の範疇となります。つまり‘文明’は理性によって創りだされる合理的な秩序や技術、そして活動の集積とシステムであり、一方‘文化’は無意識に創りだされ、蓄積そして伝承されてゆく、地域社会の生活様式全体と精神活動の表れであると言うことが出来ます。

この区分によって考えるならば、20世紀の都市社会とそれを支えてきた大学とキャンパスは、‘文明’的な価値観にもとづいて短期間に創りだされ、管理されてきたものであったと言えます。機能性や合理性、あるいは経済性だけを追求した戦後の日本社会あるいは世界中の都市は、極めて利便性が高まりました。しかし戦後50年、少し豊かになってみると、あまりにも単純な‘文明型’の社会づくりでは不十分であることに多くの人たちが気づいたのが現在だと言えます。やはり歴史のなかで、時間をかけて総合的な厚みのある社会づくりを行なってきた国々あるいは都市社会では、経済的にも空間的にも成熟し続けていることを忘れてはなりません。

21世紀の都市社会は、文明性に加えた‘文化性’によって創り上げられてゆくことが必要であると考えます。成熟した社会を支える場、そしてその担い手を生み出す環境としての象徴性やドラマ性も備えた、人間の感覚に語りかけてくるようなキャンパス空間の有り様を捉え直し、深層的なところから、再び創りだす試みを始めることを、21世紀型のキャンパスづくりの目標とすべきです。

また「私」から出発し、地域社会や集団が意識され

て‘共同’という社会的な概念を生み出し、定着させてゆく必要もあります。これまでの日本の近代化の歴史のなかでは、国家があまりにも強すぎたため、この‘共同’の部分がうまく実現して来ていません。しかし、公共性のない「私」の概念の集積は、混乱とアナーキーを生み出すだけです。わが国における大学、そして大学キャンパスの今日的な状況は、まさにこの公共性、共同性という概念が欠落した「私性」の集積と氾濫の場ということが出来ます。

来るべき21世紀のキャンパスづくりは、‘文明’によってつくられ貯えられた「近代的な力」を充分に備えた20世紀型（文明支援型）大学に、この‘文化’という深層的な価値観による「環境の魅力」を加えて、再創出・再編してゆくことであると考えるべきです。キャンパスの環境そして自然は歴史的に形成されたものであり、享受されるものであるという基本的な考えに立ち還って、再創出してゆくことが必要となります。

世界各国の大学で、この‘文化’と‘共同’という価値観を中心に据えた「社会的な魅力づくり」と「環境づくり」を目指したキャンパス計画への試みがスタートしています。生活と生存を根源的なものと考え、環境観と自然を計画の基本的な前提として、風土と地域価値にもとづいて私達の教育研究環境を考え、組み立て、そして地域社会の生活と強くつながる空間づくりを通して、これからの都市社会を考え、再編・再構成してゆく文脈が次世紀のキャンパス計画には強く必要となります。

3. 文化創出時代のキャンパス―新たな大学づくりの必要条件

次世紀を目前として、人類の未来を切り開くため、知的創造の中心である大学に対する期待と大学自身の責任は大きいものがあります。大学をとりまく環境の著しい変化に対応しながら、日本における戦後50年の教育研究の在り方と方向性を再構築する一環とし、教育内容や組織の見直しを基本としつつ、将来を見据えた新しい大学像を確立とそれを支える環境の形成がキャンパス計画の大きな課題となっています。

80年代半ばに「情報処理と情報伝達の技術革新」が急激に進展し、同時に進行していた「生産技術の高度化」,「経済社会の国際化」,「価値集団の多様化」などの多重な社会構造の変動を背景としながら、社会計画の領域では、 生産システム＋基盤づくりから生活システム＋環境づくりへの転換、 新開発主導から再開発・再整備主導への転換、 行政主導から民間主導への転換、 計画支援情報システムの高度化など、社会づくりの目標とパラダイム転換が声高に論じられてきました。その後10余年、なかなか方向転換がきかない巨大タンカーのような社会形成をめぐる議論もようやく新たな方向性を見いだして、少しづつ動きだし始めたようです。大学も着実に大きく方向転換をしはじめています。

4. キャンパス計画の基本理念と計画概念

ここでは、北海道大学のキャンパス計画を事例としながら、21世紀型社会形成へのシナリオを描きだす役割を担う文化創出支援の場、環境としての大学に求められる「キャンパス計画の基本理念」と「環境形成の計画概念」の整理と提案をおこなってみることにしましょう。

4.2 キャンパス計画の基本理念

①固有のランドスケープの継承と保全

広大・ゆとり・大らか・ロマンなど、世界に共通な北の大地の代名詞ともなっている 風土に育まれながら歩んできた北海道大学のキャンパスランドスケープは、北海道の風土のシンボルであり北海道大学人の気質の代名詞でもあります。クラーク精神を今にも彷彿とさせるこの固有のランドスケープは、北海道大学の歴史的な遺産として、今後も変わらず継承し、入念な維持・管理によって保全してゆく必要があります。

②キャンパスの歴史性の継承と展開

北海道大学のキャンパスは、札幌農学校から北海道大学へという大学の創設・発展の歴史のなかで、札幌農学校のキャンパス（クアドラングル）を中心として、時代とともにそして都市の発展とともに北側に拡大してきました。その成長変遷の過程を透かし見るならば、キャンパス北側に広がる農場を21世紀の北海道大学そして札幌市の新たな発展と展開の中核的なステージとして位置付け、これからの新たな文化創出時代の大学像を実現してゆく場として理解することが出来ます。

③研究教育する「人間的場」としてのキャンパス

近代社会が求めた近代的な文明形成を支える教育研究の場としてのこれまでのキャンパスから、２１世紀型の文化型社会の創出を支えること目標とした教育研究の環境＝場として、キャンパスの位置付けを変貌させてゆくことが肝要です。そして、自立した教育研究生活を支えるキャンパスヤードは、地域社会に開かれた豊かな存在でなければなりません。

④地域と結びついた「社会的装置」としてのキャンパス

「大学」自からが変化することが求められている時代にあって、次代を創出する視点を明確化し、教育研究に対する社会のさまざまなニーズに、大学として適切に応えることの出来るキャンパスづくりが必要です。地域のニーズと呼応し、地域の特性を生かした学術・教育・研究・文化の拠点・求心機関としての自覚にたって、時代の変革に柔軟かつ先導的に対応できるキャンパスマ スタープランづくりを目指すことが必要不可欠となります。

⑤都市のなかの「小さな都市」としてのキャンパス

広大な敷地を持つ北海道大学は、千歳空港と短時間で直結する道都札幌の中核拠点である鉄道駅に近接し、大学周辺の市街地はその高度利用も著しいものがあります。それ故、これまでのように「大学」という名のもとに閉鎖的な環境として、また閉鎖的な大学人が占有しうる場としてのみ存在することは許されない状況が多くあります。広く社会に開かれて、街や市民と一体になって発展してゆこうとする、大学が本来的に持つべき姿勢と努力が必要不可欠です。中世における大学の創設期をふりかえって見ると沢山の示唆があります。

⑥「研究教育の場」から「地域社会の環境」

大学のキャンパスとは、個々の研究室、実験室、図書館や教育施設が単に集積した敷地ではありません。タウンとガウンの分離はよい結果を生まなかったという反省は、世界の大学の共通事項です。

次世代の大学キャンパス計画では、つねに変化する細胞のような研究単位を、研究の先端性や時代性，そして大学としての社会性に基づいて、緩やかにそして柔軟に束ね、変貌する成長するプログラムと計画性を持っていなければなりません。これを重視せず、従来型の施設配置や基盤的な施設計画による目標明示・達成型キャンパスづくりでは、常に変化する特性を持つ次世代の大学像には不適切です。これまでのキャンパス計画では予定調和的な目標像の合理的予測と固定的な施設利用計画がキャンパス計画の「戦術」でした。しかし、次世紀におけるキャンパス計画では、教育研究生活の質や創造性を大切にしながら、長期間にわたって変化し成長し続けてゆく事ができる持続・管理型のキャンパスづくり、あるいは目標そのものを順次創造してゆく可変型の施設利用計画が必要となります。その為に必要な要件としては、大学人の計画的な「戦略性」とフレキシブルな目標「創出術」、そしてキャンパス計画と施設利用計画の硬直化を避けるための「ローリングシステム」が不可欠となります。このとき、「骨格的な空間形成のガイドプラン」が不可欠であり、これは取りもなおさず予定調和を前提としたこれまでの常識から離陸して、「協調・協働の論理」,「共創の論理」にもとづくプログラムへの移行が必要条件となります。また19～20世紀的な機能概念、施設利用概念にもとづく「プレイス・マーキング型計画」（＝「どこ」に「どんな施設」を「どう配置するか」ではなく、あくまでも社会性や文化性の高い環境装置としての「骨太な公共空間や環境」を「どこにどのようにして創出するか」という骨格的キャンパス概念にもとづく「スペース・メイキング型計画」（拠点、拠線・拠帯などによる構造化）でなければなりません。○○学部や××研究科、そして△△センターなどの施設の恒久的な配置計画に依存したプレイス・マーキング型の20世紀的キャンパス計画では、それらの内容変化や実現化のつまずきによって、キャンパス計画自体が頓挫したり、極めて短期間のうちに使いものにならなくなったりした例は枚挙に暇がありません。

⑦ 時間的プログラムにもとづく計画戦略と誘導の必要性

21世紀型キャンパス計画を誘導するには、基礎的な条件と基盤的な動向を十分に捉えることによって得られたものの上に立った、より長期的な「フレームワーク・プログラム」として方向性と戦略を骨格として組み立て、骨格的な都市構造計画図と戦略的プログラム図として表現する必要があります。同時に、将来像を大学人および市民とともに共有化しながら、その内容を「小さな実現可能な内容」として明らかにしながら、市民・大学人とのパートーナーシップによる戦略に置き換えたキャンパス計画として表現し、役割分担を示した協働型「キャンパス計画」を行なうという、二重構造化が必要となります。さらに、二重構造による「キャンパスづくりプログラム（＝望まし

い大きなマスタープラン)」は、フレームワークとカセットが充分に具体化された「前期プログラム＝(小さなマスタープラン)」と不確定さを含む「後期プログラム」に区別されるべきです。5～7年単位でのこのプログラムの見直しを行い、小さなマスタープランは当然のこと、フレームワーク・プログラムの修正も可能なローリングシステムを前提とすることが必要となるでしょう。(図1参照)

4.2 環境形成の基本的な計画概念

①エコ・キャンパスの形成／自然生態系と教育研究活動の共生

自然と豊かなキャンパス環境に根ざした特徴ある教育研究の推進をアカデミックプランの一つの眼目とすべきです。自然生態系と教育研究活動が共生するエコ・キャンパスを自然環境の修復と保全により創出し、21世紀型社会への研究教育の発展と充実した全人教育をめざすことが大切になっているからです。豊かな自然と共生意識をないがしろにしては感性の豊かな人間は育たないことは明らかです。またエコキャンパスを生かして社会人の生涯学習をすすめ、あわせて地域社会に根ざした教育研究を進めるために、キャンパス全体をミュージアム化し、積極的に地域に開かれたものにすることも重要になります。

②ユニバーシティ・センターの形成／市民との交流の場

周辺の教育研究施設や市民にも開かれた共用施設と共に整備されるオープンスペースは、キャンパス内での教育研究を育むための中心的なアメニティ空間であり、そして大学人・市民が集まり交流するための空間でもあり、大学生活の舞台として、同時に市民の交流拠点ともなるものです。(図2参照)

③教育研究ゾーンの再整備／教育研究の場の拡充と改善

教育研究（アカデミック）ゾーンは、複数の学部・研究科を束ねた「コミュニティ・ゾーン」から出来上がるものであって、あくまでも歩行圏を単位として完結する教育研究の基礎生活圏であり、車に依存した教育研究生活環境は目標として避けなければなりません。それぞれの教育研究（アカデミック）ゾーン

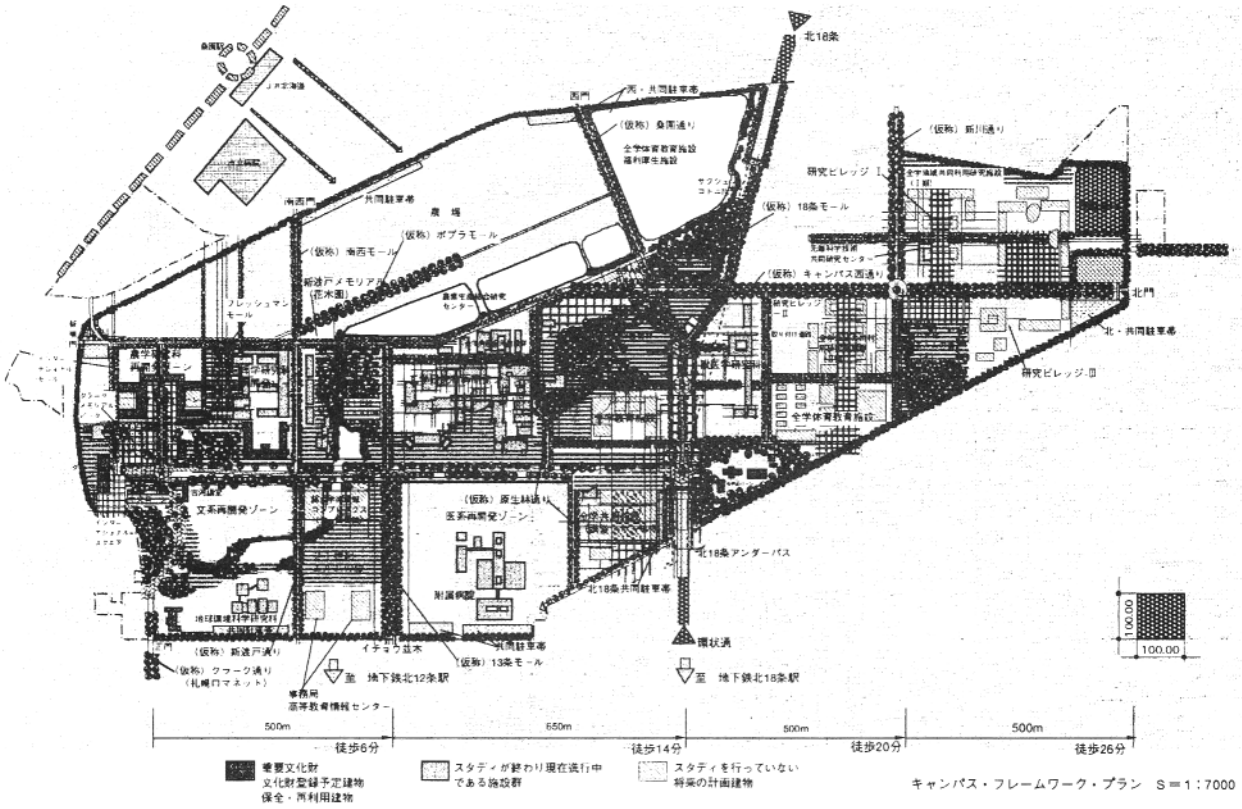

図1　フレーム・ワークプラン

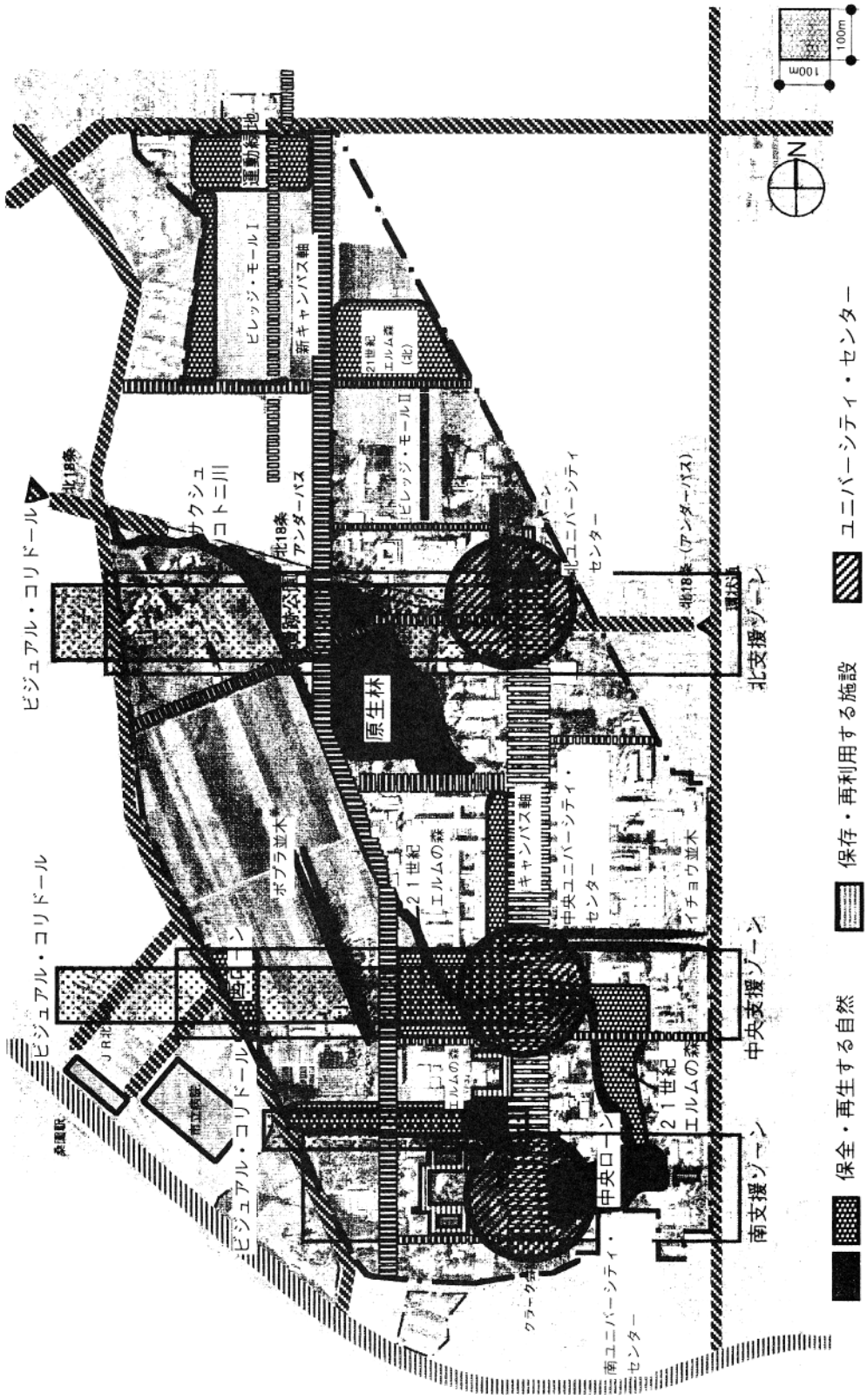

図２　環境形成のための計画

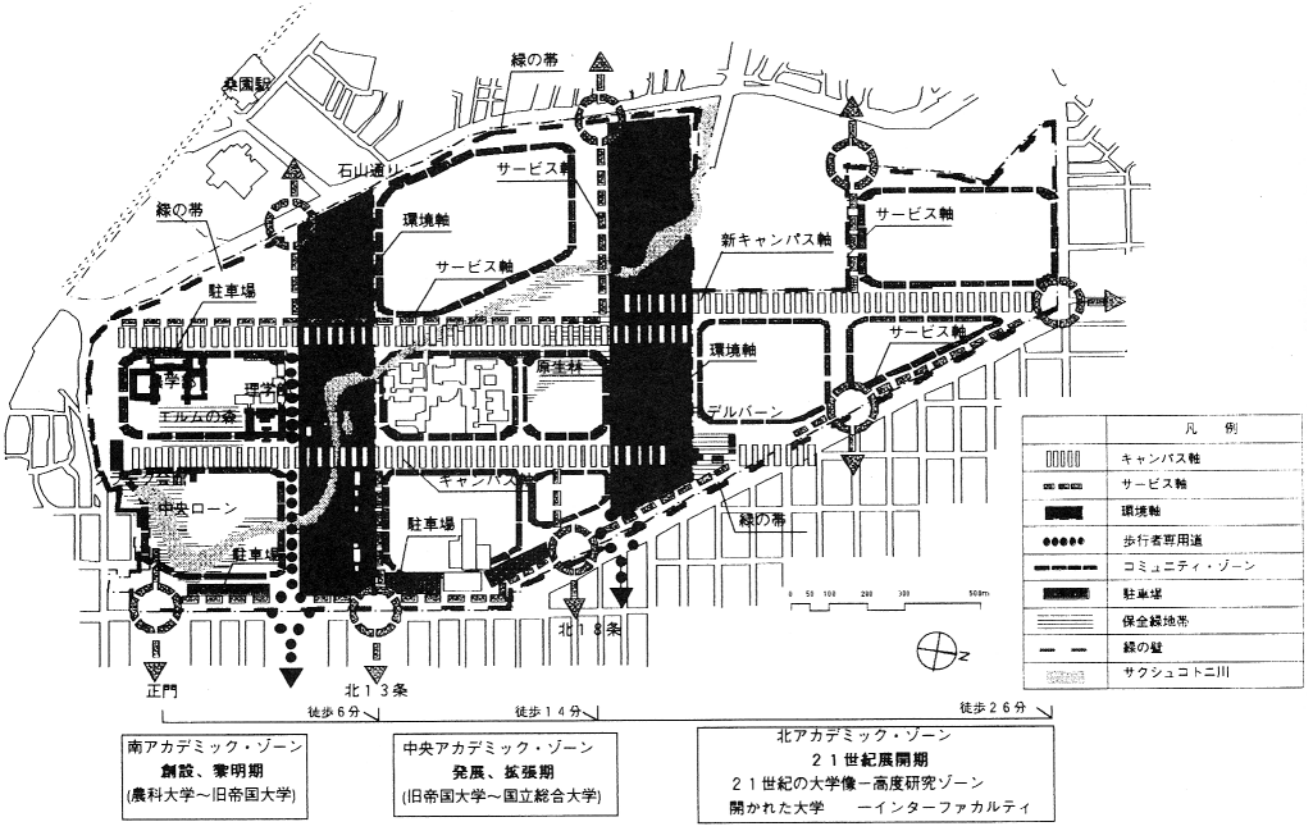

図３　キャンパスの基本骨格

は、キャンパスの発展成長を継承しながら、教育研究環境として独自の特徴を持ち、キャンパスの秩序と調和を創りだす単位圏であり、人間環境圏でもあるキャンパス計画の単位です。小さなマスタープランはこの基本的な計画単位に基づいて作成されてゆくことになります。（図３参照）

④研究ビレッジ・ゾーンの計画的形成／地域社会と連携した新たな大学像の創造

原則としてキャンパス内の研究所・研究センターは「研究ビレッジ」として集中的に配置し、十分なスペースと高度なインフラが整備された落着いた研究環境、充実した研究支援体制を整え、産学官共同研究や国際研究交流の拠点とすることが必要となります。